

中3テーマ学習：「地域研究ガイドブック」づくり

－国語科と社会科のT.T.による本づくりの取り組み－

筑波大学附属駒場中・高等学校

社会科 大野 新

国語科 澤田 英輔

中3 テーマ学習：「地域研究ガイドブック」づくり

－国語科と社会科のT.T.による本づくりの取り組み－

筑波大学附属駒場中・高等学校

社会科 大野 新
国語科 澤田 英輔

要約

本稿は、昨年（2013）度中学3年生（本校65期生）を対象に開講したテーマ学習の実践報告である。このテーマ学習では、中学校の総合的学習の時間で実施されている地域研究（フィールドワーク）の一連の活動（準備・実施・報告）を生徒自身のことばでまとめ、書籍の形で出版した。生徒自らが体験したことをまとめたものであり、貴重な出版物となるとともに、フィールドワークの本質とは何かを考えるよい材料ともなっている。成果物は後輩のフィールドワークに利用され、活動の継承にも大きく貢献している。

キーワード：地域研究 フィールドワーク 出版学習 図書館 T.T. 地理教育

1 はじめに（テーマ設定のねらい）

本校では、中学校3年生を対象に、テーマ学習という選択学習を展開している。1993年からの実施でありすでに20年以上の歴史をもっている。

昨年、大野と澤田は、T.T.による地域研究ガイドブック作成に取り組むテーマ学習を実施した。

実施のねらいは、複数ある。第一に、生徒が書籍の作成に直接取りくむことにより、原稿の構成から執筆、校正までの一連の流れを理解することである。書籍を刊行するには、対象読者を想定した構成や表現など、さまざまに考慮することが必要となるが、こうした要素を考慮することで、生徒の文章能力育成に大きく貢献することができる。ここで、生徒が取り組む書籍の題材として選んだのは地域研究である。これは、本校の中学2年・3年が取り組んでいる総合的学習のプログラムの一つである。つまり、身近でかつ実体験にもとづく活動の記述に取り組むことで、より具体的な出版活動ができると考えたからである。

第二に活動場所として図書館を利用することがあげられる。授業での図書館利用は近年大きく注目されており¹⁾、知の集積地である図書館を授業に活用することにより、デジタル時代に生きる中高生に改めて印刷物の重要性を伝える機会ともなる。

2 テーマ学習とは

『テーマ学習を創る』によれば、本校でテーマ学習の実践が始まったのは、1993年である。1991年、学習指導要領から取り入れられた選択学習の一環として導入された。本校では高校受験がないという利点を活かし、中学3年生に通常の授業では得られない学習活動の場を設定しようとした試みであった。その後、2002年からは総合的学習の時間が始まり、学校5日制も始まったが、テーマ学習は現在まで存続している。

始まった当初からテーマ学習は、教員が設定したテーマの中から生徒が好きなものを選択し、学習する形式である。テーマは各教科の担当者が、生徒とともに取り組みたいものを設定しており、必ずしも生徒主導のテーマ設定ではない。教員は通常の授業では扱いつらい内容や方法のテーマを設定する。また、場合によっては他教科の教員とのT.T.で実施する。少人数であることや他教科の方法論を学ぶことで教員自身も大きく成長できる授業となっている。

たとえば大野は、これまで駒場周辺を歩く（歴史とのT.T.）、共生の展開（国語や英語とのT.T.）、環境白書をつくろう（理科とのT.T.）などを経験してきた。そのほか単独でメディアリテラシーなどにも取り組んできた。いずれも通常の教科の授業では取り組めない内容で、成果をあげることができた。

ちなみに、2013年度のテーマは下記のようなもので

ある。()内は担当者の教科。

A：地域研究のガイドブックをつくろう（国語・社会）、B：言葉と映像の世界（国語・美術）、C：法と市民社会（社会）、D：数学ワークショップを企画しよう（数学）、E：化学のお作法（理科）、F：スポーツイベントプロデュース（体育）、G：武道をゆく（体育）、H：Science Dialogue Jr.（英語）。

学年123名を8つの講座に分けるので、平均的には15名前後だが、希望を優先するので必ずしもそうはならない。本講座の場合、選択者は25名であった。

授業は、土曜日を使って行われている。通常は、年間を通じて6～7回程度で、時間数は各回で異なり、2時間から4時間である。

3 題材として選んだ「地域研究」

3.1 地域研究とは

地域研究とは、本校において20年以上前から実施されている課題学習である。生徒が班に分かれて研究テーマを設定し、各自の研究テーマを探究するための訪問先を見つける。実際に校外に出て、さまざまな企業や機関、役所などを訪問して聴き取りを行っている。1999年(52期生)からは、研究した内容を報告書にまとめるだけでなく、発表会という形式で研究成果を共有することも行っている。

とくにカリキュラム上に総合的学習の時間が位置づけられるようになると、中1の3学期から中3の1学期まで、長期間にわたって地域研究のプログラムが実施されるようになった。

なお、本校の地域研究のような、生徒が自らテーマを設定して調べ発表するいわゆる「探究型学習」は、日本ではすでに数多くの実践が重ねられている²⁾。特に「総合的な学習の時間」の設立以降は、全体としてはまだ少数ながらも取り組む学校も徐々に増え、その成果を出版する事例も増えてきた³⁾。こうした動きの理由としては、まず「総合的な学習の時間」開始を受けて先進的な学校の事例が共有されてきたことや、それを受けて新たな取組みをはじめた学校のノウハウが蓄積されてきたことがある。今後も探究型学習重視の動きは強まっていくものと思われる。

本校の地域研究はこうした先行事例を直接参考に行っているわけではない。しかし、広い意味で同じ観点から、着想から発表（論文やプレゼンテーションなど）までの生徒の探究プロセス全般を支援することを通じて、生徒が協同で探究的に学ぶ力を育てようとしている。そうした点で、これらの探究型学習の実践と同じ

ものと位置づけて良いと思われる。次項では、地域研究の内容を具体的に述べる。

3.2 東京の地域研究

中学2年生の5月20日前後の2日間に実施される東京の地域研究の過程をまとめてみる。

①中学1年の3学期（プレ東京地域研究）

各クラス5～6名の班に分かれ、見学したい博物館・美術館を選び、実際に生徒だけで見学に行くものである。スケジュールや交通手段を考え、交通費・見学費などの計画もたてながら実際に校外で活動する。また見聞した内容は簡単に報告も行っている。また、社会科学（地理）の授業では、東京に関する学習をすることで地域研究の基本知識を得ている。

②中学2年の1学期

研究の希望分野に応じてクラスごとに班分けを行い、研究テーマを絞り込む。班で相談しながら訪問先を選び、生徒だけで訪問先と交渉していく。2日間なので4～5カ所の聴き取り先を選定し、交渉していく。相手側の了解が得られると依頼状と質問票を送り、聴き取りの準備を進める。行動計画や行動費などは事前に計画をたて、当日に備える。当日は、班員だけで協力して訪問先を回っていく。聞き取った内容は2カ月程度で原稿化し、報告書にまとめる。また7月には班ごとの研究成果をパワーポイントやポスターを使って発表する。発表会には下級生や保護者も参加している。

3.3 東北の地域研究

中学2年の秋からは、中3の5月に実施する東北の地域研究の準備が始まる。本校では長年にわたって東北地方で修学旅行を実施してきた。かつては山形で農家民泊などを行った時期もあったが、1992年以降は岩手で地域研究を行ってきた。しかし、2000年52期中3の時に青森県を対象地域としたのをきっかけに、2009年61期では山形県でも地域研究を実施するなど、東北地方の各県にフィールドは拡大していった。

しかし、2011年3月の東日本大震災は東北の地域研究を大きく変えた。2011年度は東北の地域研究は中止となり、年度末に和歌山を訪れることとなった。また、翌年も震災の影響を鑑みて、富山県で実施した。ようやく2013年度から岩手県が復活し、震災学習を取り入れた地域研究を実施している。

準備は東京の地域研究と同様に班ごとに研究テーマを設定し、訪問先を設定していく展開である。ただし、東京とは異なり、移動時間や研究テーマに制約がある

ため研究の計画づくりは少なからず困難をとまなう。なおかつ、生徒の大部分は現地の土地勘がないため、たとえば行動計画一つたてるのも大変であるが、現地の協力も仰ぎながら計画づくりを進めていく。

2014年度の場合、宿泊地は遠野、宮古、盛岡（繋温泉）であった。その宿泊地を移動しながら途中で研究テーマにそった訪問先を訪れ、聴き取りを積み重ねていく。その内容は報告書にまとめるとともに発表会を行って、学年の生徒や下級生と共有している。

以上の2回の地域研究によって、生徒は探究を深めるとともに、実社会との接点を持つようになる。多くの学校で中学の進路指導の一環として行われているインターンシップ（職場訪問）の一つの形ともいえる。

4 地域研究ガイドブックの作成

4.1 テーマ学習「ガイドブック作成」のねらい

本テーマ学習の特色は、上記のような長年の蓄積がある地域研究のガイドブックを、教師ではなく生徒の手で作る点にある。作成する参加生徒は前年に東京地域研究、当年に東北地域研究を経験している中3生徒である。作ったガイドブックは、翌年「東京地域研究」を行う予定の中1生徒に配布することで後輩に貢献するという目的もある。ここで、教師ではなく生徒がガイドブックを作る狙いは以下の通りである。

1) 教師の考える「理想的な地域研究」よりも、生徒の実態に沿ったガイドブックを作成できる。

⇒これまで、地域研究を進める上でのマニュアルはすべて教員側で用意したものを使用しており、学年の担当者が受け継いできたものであった。

2) ガイドブックを作る過程で、参加生徒が地域研究を振り返り、経験者の視点から地域研究の意義や効果について考えることができる。

⇒これまで、教員の言葉を伝える形であり、生徒の側に意義や効果を考えさせることは少なかった。

3) 後輩を読者に想定して出版するというゴールを設定することで、効果的な出版学習の場になる。

本授業は、このような効果を念頭に計画された。

4.2 テーマ学習の実際

授業には、事前オリエンテーションを経て希望した25名の中学3年生(65期)が参加した。実際の授業日程は次の通りである。正規の全6回の授業時間では到底ガイドブック作りができないので、合間に何度も会合を重ねて、全体としては次のように授業を進めた。

①振り返り期間（6-7月）

前年度に生徒が経験した「東京の地域研究」を振り返り、その意義や成功のコツなどを話し合う期間。地域研究について省察するとともに、本作りの動機付けや章立ての検討にも活かされた。また、7月には25名の生徒を、ふたたび地域研究を行う4つの「研究班」21名と、彼らの成果を活かして本作りを中心的に担う「編集班」4名に分けることが決まった。

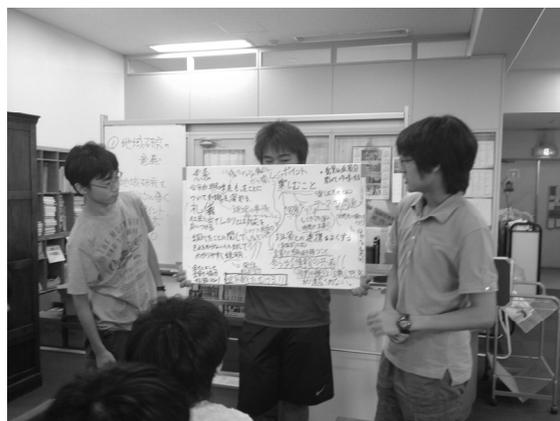
【授業日程】

・第1回(6/22)

この授業を選択した動機、地域研究の意義や成功するためのコツについてグループで討議し、発表した。

・課外授業(7/16)

中学2年生(66期)の東京地域研究発表会を見学。一年前の自分たちも振り返りつつ、彼らにあてて必要なガイドブックが何かを討議した。班分けも決定した。



写真—ホワイトボードで発表する

②地域研究実施期間（9-11月）

4つの研究班が自分の経験をふまえて再度地域研究のテーマを決め、取材する期間。この時、編集班は個々に担当の班を決めて、どのようなプロセスで取材が行われているかを観察し、取材にも同行した。



写真—図書室を利用した授業

【授業日程】

・第2回(9/14)

研究班が11月の取材のテーマ、そのテーマに至った理由、他のテーマ候補を没にした理由などを発表した。ここで地域研究の「成功」とは何かという問題も議論された。

・第3回(9/28)

研究班が一次計画書の内容（訪問先と個々の訪問先での問い）を発表し、相互にコメントした。学校司書の加藤も同席し、コメントをした。

・第4回(10/19)

11月の取材に向けた準備を行った。研究班がアポ取りの現状を報告し、ほぼ確定した訪問先候補を発表して、相互にコメントをした。また、彼らが東北の地域研究でお世話になった新聞記者の宇田川宗氏より、取材にあたっての心がけをうかがった。

・課外授業(11/5-6)

文化祭休みの2日間を利用して、班ごとに地域研究を実際に行った。後日、お礼状の送付なども行った。

③本作り本格化期間（11月-翌1月）

地域研究の一応の終了を受けて、それをもとに本作りが活発化する期間。4名の編集班が中心となり、本の構成や内容について議論し、検討を進めた。加えて、4つの研究班は1月に中学1年生(67期)に向けて地域研究のポスター発表とプレゼンテーションのデモンストレーションを行うことになり、それに向けて準備を進めた。

【授業日程】

・課外授業(12/10)

11月末までに編集班が中心に検討してきた目次案について、全体で討論した。

・課外授業(12/19)

研究班の報告書の提出。また、1月の研究班のデモンストレーションに向けて、その発表方法を決めた。本の大きな目次案についても、この頃確定した。

・第5回(1/18)

研究班が、東京の地域研究を始動した中学1年生に向けてデモンストレーションを行った。発表形態の内訳はポスター発表1班、ポスター発表+映像1班、スライドでのプレゼンテーション2班であった。



写真-中学1年生へのデモンストレーション

④本の執筆・推敲・校正期間（1月-3月）

3月の出版に向け、編集班を中心にガイドブックの執筆・編集作業が進められた。この間、正規の授業はほとんどなかったものの、編集班は毎週のように協議と執筆を重ねた。研究班は、ガイドブックに掲載する報告書ダイジェスト版を作成する他、編集班に必要な情報を提供し、読者として気づいた点を述べるなどのサポート役に回った。なお、2/6には、このテーマ学習に対するアンケートも実施した。

・課外授業(1/28)

編集班が書き進めてきたガイドブック原稿について、全体で読み合って意見交換をした。

・第6回(2/8)

ガイドブック原稿を読み合って意見交換を行った。4つの研究班の報告書を読み合い、ガイドブックに掲載するものを選出した。正規の授業としてはこの回が最終回であり、授業後にアンケートを実施した。

・課外の推敲・校正活動(2/8-3/10まで)

最後の授業終了後も、編集班編集班はガイドブック原稿の作成を続けた。内容の推敲から誤字脱字チェックに至るまで、ほぼ毎日に近い形で活動を行い、3月10日に校了した。

以上のように、本授業では正規の枠を超えた課外授業を頻繁に行うことで、ようやくガイドブックの出版にこぎつけた。こうして完成した「地域研究ガイドブック」は、新年度になって、これから東京地域研究を行う新中学2年生(67期)に贈呈された。

4.3 テーマ学習の成果

4.1 で述べたように、本テーマ学習は次の効果を想定していた。

1) 教師の考える「理想的な地域研究」よりも、生徒

の実態に沿ったガイドブックを作成できる。

2) ガイドブックを作る過程で、参加生徒が地域研究を振り返り、経験者の視点から地域研究の意義や効果について考えることができる。

3) 後輩を読者に想定して出版するというゴールを設定することで、効果的な出版学習の場になる。

このうち 2) と 3) については概ね肯定的に評価しているが、1) については課題があった。以下、その点を記したい。

4.3.1 狙い 2) について

まず 2) について述べると、ガイドブックを作成する生徒の活動を通して、地域研究の意義や課題を検討できた。例えば、地域研究の意義については、第 1 回の授業でグループごとにミニホワイトボードに記入して発表した。その内容は以下の通りである。

- ・世界を学ぶ(?) 自律・しめきり・時間
- ・視野を広げる・将来役に立つ (はず)
- ・社会の授業では学べない素性を明らかにする
- ・大人の階段登る
(取材、アポ、文章化、プレゼン、ミーティング)
- ・社会体験・社会の礼儀を学ぶ
- ・計画をたてる能力を育む
- ・自分が興味をもったことについて知識を深める
- ・得た知識を自分のものにして今後の生活に役立てる
- ・深くテーマについてほり下げる →新しい世界観
- ・班、グループで行動する →団体行動・友情
- ・好きなことを深める →将来の選択肢が増える
- ・社会勉強 (アポ取り、取材時の礼儀、プレゼン)
- ・アポをとることで世間の常識を学ぶ
- ・その道のプロと会うことでより深く学べる。
- ・発表やプレゼンの方法を学ぶ

生徒の指摘はおおよそ次の 4 点にまとめられる。

- ①自分の興味のある分野について深く学べる
- ②社会的な礼儀などを学べる
- ③クラスメートとの関係が深くなる
- ④学び方を学べる (計画・アポ取り・プレゼン等)

おおむね妥当な指摘ではあるが、①よりも②を指摘する声が教員側の予想以上に多く、地域研究が生徒にとってはじめて「社会」を意識するきっかけになっていることが強くうかがえた。

このように、本授業では、特にその前半に「振り返

り期間」を設けて地域研究そのものについて議論する時間を多くとったことから、生徒はこれまでの自分の学習を意味づけることができた。最終授業にあたる第 6 回 2/8 の授業中にとったアンケートを見ても、この「振り返り期間」を肯定的に評価する生徒の声が非常に目立った⁴⁾。彼らにとっても地域研究の捉え直しにつながったのだと思われる。

4.3.2 狙い 3) について

出版学習とは作文教育の一形態で、本などの出版物を作る活動を通じて、構成を考え、取材し、執筆し、編集し、校正するという文章産出プロセス全体を、高いやる気を維持しながら経験することを狙いとする。今回は、出版を前提としていたために生徒のやる気は高く、執筆の目的や想定読者も具体的に決まっていたため、出版学習としては極めてやりやすい条件が揃っていた。加えて、編集班に DTP ソフトである In Design の操作ができる生徒がいたことも非常に幸運だった。

出版学習としての成果を何で測るかというのは難しいが、特に本作りの中心となった編集班 4 名は、何度も全体の構成について考え、原稿を書き直して読みなおして修正する、ということを繰り返した。最後の誤字脱字のチェックに至るまで、非常に高い集中力で本作りを行っており、これは通常の国語の作文授業では考えられないことであった。また、本作りの過程で対立が発生し、それを調停・解決する必要に迫られる場面もあり、編集班の生徒にとってはこのプロジェクトが濃密な経験であったことは間違いない。

4.3.3 狙い 1) について

以上のような成果と比べ、本作りを進める中で問題になったのは、1) の狙いである。教員ではなく生徒がガイドブックを作ることの意義は、生徒の実態をそれに反映できるということだった。しかし、地域研究をあらためて振り返り、またあるべき姿を議論する中で、地域研究が抱える課題もまた浮き彫りになっていった。以下、それについて記述する。

課題①：テーマ設定について

最も大きな課題が「テーマ設定」である。9/14 の第 2 回の授業では、各研究班の決めたテーマや、そのテーマに至る過程で没になったテーマ候補、それを没にした理由などが発表されたが、その結果、次のような要素がテーマ決めに影響していることがわかった。

①取材の実行可能性—取材を受けてくれそうか、予備知識があるか(得られるか)、取材先が遠すぎないか。

②話題性—社会問題として話題性があるテーマか、またはありふれすぎていないか。

③結論の見通し—結論がまとまりそうか、色々な立場の意見を聞けそうか。

④取材先への興味—行ってみたい場所かどうか。

研究班の生徒は、このような複合的な要因でテーマを絞り込んでいた。こうした観点は完成したガイドブックにも反映された⁵⁾が、特にこの授業での討議によって、本校の東京地域研究のテーマ設定については「テーマを決める時間が短く、テーマを深めることができない」「友人関係や行ってみたい場所が優先される」という傾向が指摘された。加えて、後日の報告書の作成や発表会が前提となっているために「発表のしやすさ」からテーマを考える傾向も指摘された。

テーマ決めは、地域研究全体の質を左右する重大な局面である。しかし、実態としては十分な時間をかけられず、調べたい問いよりも訪問したい機関が優先したり、結論への見通しがたちそうな無難なテーマが選ばれたりする傾向が浮き彫りとなった。

課題②：調べ方について

地域研究では、実際に訪問前に取材の約束をとるにあたって下調べを行うが、その手段がインターネット検索に偏っていることも課題であった。この点は担当者の大野がつと感じていることでもあったが、すでに地域研究の経験を経た今回のテーマ学習の研究班の活動に関しても、やはり同種の傾向が見られた。

これは、本校では図書館の整備が遅れ、書籍資料・データベースなど、地域研究を行うのに十分な支援体制が整っていないという事情もあった。高度情報化事業を通じてようやく図書館の整備が進みつつあるので、徐々に改善を進めるべき点であろう。

今回のガイドブック作成に際しては、このような課題に直面した時に、どこまで実態を尊重したガイドブックを作るかが問題になった。例えば、テーマ設定について生徒が実際にやっていることを記述するのか、それとも議論の結果や探究型学習に関する他の書籍なども参考にして「こうあるべき姿」を書くのかという点が、長い間議論された。結果として編集班は後者を選択し、教員2名もその方針を支持した。このガイドブックが後輩に「テキスト」として配布されることを考えるとその判断は妥当だったと思うが、一方、これによって研究班の活動とは異なる内容がガイドブックに反映され、研究班と編集班の間に意識の壁を作ってしまった点は否めない⁶⁾。生徒を研究班と編集班に分けたのは、本作りには多すぎる人数に対応した結果で

もあったが、この点を考えると、反省もあった。

4.4 ガイドブックの実際

本稿にはガイドブック全部は掲載できないが、資料として後掲した部分について解説を加える。

①目次：本を作成する上で根幹となる目次の構成は編集班が原案を考え、意見を出し合った。研究を積み上げるイメージから **Step** という表現を使っている。

②はじめに：ガイドブックの目的と使用方法について述べた部分。後半部分に、下級生にどのようなスタンスでこの本を使ってほしいかを記述したが、揺れ動いている部分がみられる。

③地域研究の意義：前述したように、生徒が自分自身の経験をふまえて出した意義をまとめたものである。教員側は地域研究を始める前のガイダンスでこのような意義について語っていたが、あらためて生徒の側から提示されたことに対して納得ができた。

④地域研究の流れ：研究の流れを4つの段階に分けてさらに細かくステップにきざんだ。強調しているのは「問いをたてる」というステップである。また途中で行き詰まったときに前に戻ることも示唆している。

⑤テーマ決め（疑問を探す）：「問いをたてる」ことからテーマ決めにつなげるという部分を具体的に述べたところである。

（テーマを絞る）：テーマを絞りこんでいく部分を研究班の実際のやりとりをもとに組み立てている。

コラムでは進行の際の工夫についてまとめている。

（テーマから問いに変える）：問いにあくまでこだわっているので、テーマをもう一度問いに変えることを勧めている。役割決めの部分も自分たちの経験をもとにまとめている。

⑥訪問先決め（訪問先を決める前に）：この部分も実際のやりとりをもとに記述している。教員側にとっても具体的なプロセスがわかって興味深かった。

（小テーマを考える）：模式図をもとにテーマの深め方について述べた部分である。これらも実際の地域研究班のアプローチを模式化したものである。

（小テーマを選別する）：この部分は、実際に地域研究を進める際にテーマの深め方に悩む班に教員がアドバイスしている内容をうまくまとめてくれた。

4.5 ガイドブックの活用

完成したガイドブックは、2014年4月に中学2年生(67期)全員に贈呈されたほか、本校図書館に数部寄贈された。この項では、後輩の東京地域研究で、このガ

イドブックがどのように使われたのかをインタビューしたものをまとめた。

①校外学習委員（地域研究を運営する生徒）

⇒ガイドブックを使った感想

・大変役に立った。（とくにいきづまった時に読むと、解決することが多かった）

・一般生徒より、運営・進行する委員にとって役立った。

・特に参考になったのは、マニュアル部分であった。

⇒意義や「問いをたてる」部分はどうか。

・時間に追われてあまり反映できていなかった。

・訪問先から返ってきたアンケートにもあったが、まず訪問ありきで、目的が後付けになった班もあった。

⇒課題はあるか

・先輩のデモンストレーションに影響を受けたのか、地域に関係のないテーマになった班もあった。

②担当教員（秋元）

・ガイドブックによって、次に何をやるかという見通しがたてられた。

・生徒がこれまで訪れた場所を記したアーカイブについては、利用しようという班よりも、さらに新規開拓をする班が多かった。

・実際の作業の内容が具体的でわかりやすかった。

・著者の中3生徒の顔が見えたので、使う時に親近感がわいた。

出来上がったガイドブックを単に渡すだけでなく、デモンストレーションなどで制作の意図を伝えたことで利用度があがったようである。やはり先輩が作ったという点が大きく作用しているようであった。

【注釈】

1) 近年の学校図書館の授業利用に関する優れた成果としては、注3に掲げたものの他、桑田(2010)、遊佐(2011)なども挙げられよう。

2) 坂本旬(2007)では探究型学習の起源を第二次大戦後の東井義雄の生活綴方実践に求めている。また生江義男(1985)によると、古くは大正時代の新教育運動を牽引した成城小学校、千葉師範学校附属小学校、奈良女子高等師範学校附属小学校などで、探究型学習の類例が見られる。

3) 中等教育における探究型学習の優れた成果として、例えば片岡(1997)や宅間(2008)、後藤・伊藤・登本(2014)など。

4) アンケートでは次のような記述が多く見られた。「地域研究をもう一度考え直すことが面白い。」「地域研究について、だんだん深くほり下げていって良かつ

た。」「これまで、地域研究自体にどんな意義があるかについて全く考えたことがなかったが、この講義でそれについて考えるようになった。」

5) 65期テーマ学習(2014)、12ページ。

6) 授業後アンケートでも、研究班の生徒の満足度は総合的には高かったものの、「本作りにもっと関わりを持ってよかった」「とりくみ自体は良かったが、本の一部しか研究班が関わっていなかったため、研究班としての期待とは少しずれた」「編集班のみなさんには感謝しているが、もっと共有してくれたら助けられたのと思う」など、編集班との温度差をうかがわせるコメントが散見された。

【参考文献】

- 1) 生江義男(1985)『教科教育百年史』建帛社
- 2) 片岡則夫(1997)『情報大航海術』リブリオ出版
- 3) 桑田てるみ(編)(2010)『思考力の鍛え方 学校図書館とつくる新しい「ことば」の授業』静岡学術出版
- 4) 後藤芳文・伊藤史織・登本洋子(2014)『学びの技 14歳からの探究・論文・プレゼンテーション』玉川大学出版部
- 5) 坂本旬(2007)『『探究学習』の系譜と学校図書館』(法政大学キャリアデザイン学会紀要4、pp49-59)
- 6) 宅間紘一(2008)『はじめての論文作成術 問うことは生きること 三訂版』日中出版
- 7) 筑波大学附属駒場中学校・高等学校(2000)『テーマ学習を創るー生きた学びの演出ー』学事出版
- 8) 筑波大学附属駒場中学校65期テーマ学習「地域研究のガイドブックをつくろう」(2014)『地域研究ガイドブック』(自費出版)
- 9) 遊佐幸枝(2011)『学校図書館発 育てます! 調べる力・考える力』少年写真新聞社

※本稿は、平成25年度科学研究費補助金「学校図書館メディアを活用した協働的な出版学習の開発」(奨励研究:課題番号25902002)の成果の一部である。

※なお、ガイドブックの実物を見たい方は大野か澤田までご連絡いただきたい。(冊子かpdfファイルで送付します)

目次

1 目次	2
2 はじめに	4
3 地域研究の意義	6
4 地域研究の流れ	8
1 テーマ決め	
Step.1 疑問を探す	10
Step.2 テーマを絞る	12
Step.3 テーマから問いに変える	16
2 訪問先決め	
Step.0 訪問先を決める前に	18
Step.1 小テーマを考える	20
Step.2 小テーマを選別する	22
Step.3 訪問先候補をあげる	24
Step.4 訪問順を考える	25
3 アポ取り	
Step.1 アポ取り	28
Step.2 質問票・取材依頼状	34
4 下調べ	
Step.1 取材前の下調べの意義	38
Step.2 取材前の下調べの方法	38
5 取材	
Step.0 取材にあたって	42
Step.1 取材	44
6 報告書	
Step.1 書き方のポイント	50

資料「地域研究ガイドブック」抜粋

Step.2 作業の円滑化	53
7 発表	
Step.1 わかりやすい伝え方	56
Step.2 資料の作り方	58
Step.3 質問への対応	62
5 資料編	64
計画書	
行動計画書	
会計報告書	
発表用ポスターの例	
訪問先/テーマ一覧	
報告書の例	
6 おわりに	106

2 はじめに

この本は65期の有志によって、今までなかなか学年をこえて共有することのなかった、しかし毎年行っている地域研究のやり方・ポイントなどについて、共有を図る目的で作成されたものです。

そのために私たちは、もう1度あらためて地域研究を行って、その楽しさを再確認するとともに、本を作るために必要な経験を積みました。

この本には地域研究の流れに沿って、各プロセスで何をどのように行えばよいかということが、65期が今までこの本を作るにあたって行ってきた地域研究の経験をもとに書き込んであります。

本編には、流れに沿って細かい解説や研究の進め方が書かれており、その際に参考になるであろう様々な資料は、「資料編」に入れました。資料編は必要なきに参考にしてください。

でも、1つ注意して给你们に、この本は本編で1つ1つ丁寧に説明を書いているがゆえに、「研究を自ら考えて行う」という楽しみを消してしまいかねない本になってしまっています。

そんなものはいらないからとにかくよりよい研究をしたい、1回研究してみてもどのよう研究を改善すればよいか知りたい、研究するとき困ったことが起こったのでどうすればよいか知りたいという方は、読んでみてください。

しかし、1回研究を自らやってみてみたい、自分の力で研究を進めたいと思う方はぜひ挑戦してみてください。この本を読んでからでは決して味わえない、悩む楽しみや考えの楽しみが存分に味

えると思います。

でも、それではこの本に書かれている内容がずっと習得できないのではないかと…ご心配なく。この本はあくまで65期の3回の地域研究の経験をもとにしているものです。ですから、はじめに地域研究をすればこれくらいの内容は得られますし、また自分でできるようになるはずです。

最後に、地域研究の機会は先生から与えられるものです。しかし、何をやるか、どのようにやるか、その部分を自分たちで工夫することによっていくだけでも楽しむことができ、また成長できます。

ぜひ、この本をうまく利用しながら、できる限り地域研究を楽しんで進めてみてください。

65期テーマ学習「地域研究のガイドブックを作ろう」一同

3 地域研究の意義

「なぜ地域研究をするのか」

今から研究を進める人が必ず疑問に持つことである。

今回、この本を作るにあたって集まった、地域研究が楽しくてたまらない25人も同じ様な問いを持った。

「なぜ地域研究はこんなに楽しいのか」

この2つの問いは同じ2つの答えを持つ。

1つ目は、新たに知識を得られるからである。

地域研究はその地域の中で自分が興味を持ったこと、疑問に思ったことを調べる。

したがって、自分の好きなことをより深く知ることができたり、疑問に対する答えを得ることができたり、その後もテーマについて関心を持つことができたりする。このほかにも、普段は入れないようなところに入れたり、様々な体験が出来たり、様々な人に取材したりするので、多くの経験を得ることができ。

ここで得た知識・経験は、世界観・視野を広げてくれる。だから知識を得ることは面白く、楽しいことなのだ。

2つ目は、新たな能力を得られるからである。

地域研究は、テーマを決めて取材し、それを発表するまでの流れが重要である。そのときに必要なのが個人の力である。

全体を意識して計画する力や、取材のときの団体行動と礼儀、発表するときの相手にわかりやすく伝える力、要所で班員と話し合う際のコミュニケーション能力を身につけることができる。

ここで身につけた能力はこれから様々なところで発揮される。1回目では実感することは難しいが、次の研究でよりスムーズに計画が進んだり、作業できたりすると、自分の成長を実感することができて、地域研究を面白く感じることができらるだろう。

地域研究をやる理由、楽しい理由はこの2つである。

でも、これらはあくまで全員が感じられる理由だ。個人で面白いと思うことは「立場が違っただけで取材内容が全く違って面白い」「取材が楽しい」など、人によって大きく違う。

したがって、ぜひ自分自身が面白いと思う地域研究の側面を見つけて、楽しんで研究を進めてほしい。



4 地域研究の流れ

エリア1のポイント

- ・自分が疑問に思ったことを調べよう
- ・テーマを様々な観点から絞ろう
- ・調べる目的を明確にするために問いの形にしよう
- ・班の中の役割を理解して分担しよう

エリア2のポイント

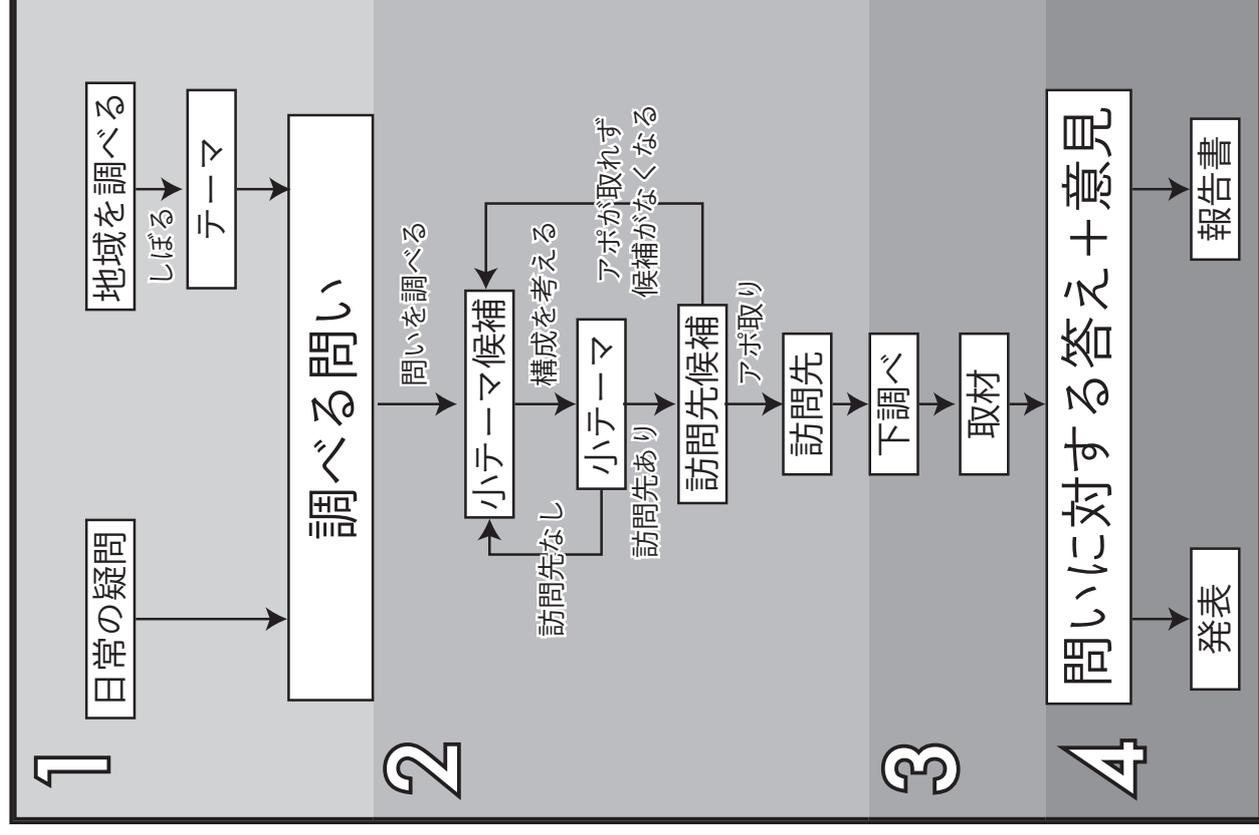
- ・問いの答えを導けるように小テーマを選ぼう
- ・小テーマを調べられる訪問先を多くあげよう
- ・アポ取りの前に、訪問先の下調べと取材の目的を明確にしよう
- ・アポは早めに取ろう
- ・アポが取れないときや訪問先がないときは小テーマを絞りなおそう

エリア3のポイント

- ・下調べをしっかりとめてまとめよう
- ・取材のときは礼儀正しい格好で、マナー良く行動しよう
- ・取材メモはポイントをまとめてわかりやすくしよう

エリア4のポイント

- ・報告書は、問いから結論の流れを意識して書こう
- ・発表資料は文字ではなく、図を多用しよう
- ・発表のときは、はっきりと聞き取りやすく話そう



1 テーマ決め

テーマ決めは、これからのすべてを左右する大事なプロセスだ。
1番大事なのは、自分のやりたいことをすることだ。自分の興味を持ったことについて調べ、知識を深めていく、それが地域研究だ。

Step.1 疑問を探す

まずは、「疑問」を探してみよう。
自分が普段生活していてふと疑問に思ったこと、前から気になってきた知りたいことから、5WH1H（何・いつ・どこで・だれが・なぜ・どのよう）の形で、疑問をたくさんあげていこう。このような疑問はたくさん持つとよい。
疑問を出し終えたら、そこからテーマを見つけていく。

- ① これまでで探しておいた疑問をテーマにする場合
テーマを一から探すのではなく、自分が疑問に思ったこと、知りたいたいことを研究するのが1番だ。
もし、後述(Step.2を参照)のような、調べにくい内容でも、疑問を解決するためにぜひチャレンジしてみてほしい。
- ② 今からテーマを考える場合
いきなりテーマや疑問というものを思いつけない人は多いだろう。そんなときのためにいくつかの方法がある。

- ・ 自分の身の回りのことについて考えてみる（自分の部活に関連することなど）。

例) テニス部なので、ラケットについて調べる。
日頃使っているSNSの実態について調べる。

また、日々意識しながら生活していくことでテーマを得ることもある。たとえば、図書スペースにある東京新聞の東京ローカルニュースなど、新聞を毎日読んでみる、ネットやTVのニュースを確認する、面白そうな番組や記事を見てもみるなどすれば、様々な場所でテーマ決めのための材料を得ることができる。この他にも、さりげないチラシやポスターなどにも目を向けるとよい。

- ・ 各メディアで報じられるホットな話題（よく耳にする社会問題など）。

例) この間TVで特集されていた耐震について調べる。
最近話題になっているオリンピックについて調べる。
都心で問題になっているヒートアイランド現象について調べる。

そのほか、テーマを探すために調べていく方法もある。そのときには、「東京の建設」など「(地域)の(分野)」といったように探すで見つかりやすいかもしれない。

その際、41 ページの「調べる」を参考にして幅広く調べよう。
このようにして、とにかく様々な疑問、興味のあることをたくさん出していく。

Step.2 テーマを絞る

やりたいテーマが見つかったら、今度はそれを絞っていく(次の例は、実際のプロセスを簡略化している)。

編集	テーマどうする？	
班長	今年、世界遺産になったから富士山とその周辺とかは？	
書記	東京にないだろ、真面目にやろう。	
副班長	SNS とかは？	5
編集	身近だけど、ほかの班とかぶるよ。	
班長	ラケットとかいいじゃん。テニス部だし。	
編集	ラケット生産は海外が主流だからきつくね？	
班長	ゲームとかは？ 今話題の会社とかあるし。	
会計	秘密とか多そうで取材断られそうだし、あんまり情報もなさそう。やめようぜ。	10
写真	お菓子にしようよ。工場見学とか楽しそうだし。	
書記	ただ見学するだけで、自分たちの意見とか、色んな視点がないさそうで調べにくいのでは。	
会計	医療ロボットは？	15
編集	おまえ、それ前から言ってたな。	
会計	このまゑ博物館で見ただけけど、今機械で手術をするというのもあるらしいし、有名じゃないけど面白いと思う。	
班長	面白そうだね。	
書記	どういう感じで手術するんだろう？	
編集	面白そうだし、医療ロボットでいいこうか。	20

上の例では大きく分けて4つの観点からテーマを絞り込んでいく。このときにも41ページの「調べる」にもとづいて少しテーマを調べておくとういだろう。

絞るにあたってはどのような場合でも、調べてみたいと強く思ったものをテーマにすることが大切である。それに対する興味が地域研究を進める原動力になる。ただし、個人で研究をするときは比較的すぐに決められるが、班でテーマを決めるとき、または同じくらい面白そうなテーマでどちらにしようか迷ってしまったときは、次に述べる観点からテーマを選ぶとよい。

①訪問可能な範囲か

実例の2行目から3行目で、「富士山について」というテーマが、東京近郊にない、ということと却下されている。このように、研究対象の地域に訪問先があるようなテーマを設定しよう。ただ、地域を限定しすぎても訪問先の候補が少なくなってしまうのでバランスを考えよう。

②情報を聞き出せるかどうか

実例の8行目から10行目のように、公表できない内容を扱うテーマは、訪問先を見つけない場合がある。

③資料が多くあるか

地域研究において、下調べは重要である。本番前だけでなく、訪問先決めやアポ取りの前などに、情報を得られないようでは困る。テーマについて書いて書いてある文献が僅かであったり、信頼性が低いものばかりであったりする場合、正しい情報を得ることが難しく、訪問先を探すのも困難になる。また、あまりにも先のことを見ずえテーマを決めてしまうと、情報が少ないことがある。そのため、テーマを決める際にもある程度資料があるかどうかを探してから決めるとよい。

④問題点に対して多くの意見があるか

設定したテーマについて研究し、一定の結論を出すのが地域研究の目的でもある。世間一般として決まった見方があるテーマ(犯罪についてなど)や、逆に今でも論議が続けられて人によって大きく見解が分かれるもの(政策など)などは、自分たちの出す結論がわかりきっていたり、逆に結論づけるのが難しくなってしまうので、場合によっては省いたほうがよいこともある。

もし、「ここまで述べたポイントにテーマが向いていない、でも調べたい」と思ったときに、どう対応するかのアドバイスを書いておく。

・訪問できない場合

「富士山について」などというテーマにすると、さすがに訪問はできない。よって、「東京で富士山はどのような影響をもたしているのか」とするなど、何かしら研究する地域に関連付けられたテーマを設定しよう。

・資料が少ない場合

資料が少ないときは、当日の訪問先の情報をもとに研究するのがよい。1度きりの取材で多くの情報を集めるので、そこまでに何を調べるのか、疑問に思っていることは何かなどを明確にする。ただ多少、訪問先の数が少なくなったり、下調べが難しかったりするだろうが頑張っで欲しい。

しかし、訪問先も見つからないほど資料が少ない場合は、テーマを変えたほうがよいかもしれない。

・問題点に対しての意見が少ない場合

自分たちの主張を見つけているための地域研究というわけではない。現状を再確認する結論だ。したがって、自分たちの主張はしにくいだろうが、現状をまとめ形で結論づけるとよい。もし、自分たちの主張をしたいのであれば、しっかりと疑問を持って研究することが必要だろう。

このように、興味のあることを調べるのが1番大切だが、常になんか結論を出すか、どのようなところに訪問するか、どんな小テーマを設定するか、など、地域研究の終わりから逆算して考えることも大切であり、それによって「訪問先がない…」「どこにも情報がない…」などという問題を起きにくくすることができる。テーマは地域研究の命。よく考えて素晴らしいテーマにしよう。

Column ~話し合いについて~

このようなテーマ決めるときなどに部活等でどうしても班員の都合が合わないときがある。そのようなときはメールで話し合うなどして決めてもよい。しかし、実際に会ったほうがメール等よりも多くの情報を1度にやりとりできるために、話し合いがスムーズに進む。あまりにも話し合いが進まない場合は、そのときに来られない人がいても、1度集まってみるのもひとつの手だ。その場合はしっかり後から来られなかった人にも報告をしよう。また、チャットなどを有効活用すると実際に会わなくてもスムーズに話が進む。

Step.3 テーマから問いに変える

Step.2で絞ったテーマを、問いの形に変えよう。この「問い」はStep.1で探した疑問と同じもので、最初に5W1Hがつく。ここでは、疑問に思ったこと、調べたことを明確にしよう。そのため、疑問から作ったテーマはそのままでもいいが、たとえば「○○について」「○○の現状」という形のものは問いの形に変える。そのときには大きく分けて2つの方法がある。

・置き換える

調べる内容は同じなのだが、「○○について」ではなく「なぜ～」というようにテーマ名だけを置き換えてみる。

これによって問いから結論という流れが想像しやすくなる、どのような情報が必要かわかりやすくなる、報告書をまとめやすくなるなどの長所がある。

例)「東京で農業をする理由」から「なぜ東京で農業をするのか」に変える

・調べることを絞る

場合によっては、置き換えるだけではなかなか疑問の形にしにくかったり、問いを変えたら調べる内容がはきりしなかったりするところがある。そのときは41ページの「調べる」に基づいて、そのテーマをより深く繰り返し調べてみよう。

そこで新しく生じたいくつかの疑問について班で話し合い、Step.2のテーマを絞ったときのようにして1つの疑問を問いとして設定して研究してみるとよい。

ここは決して急がず、じっくり調べてよりよい問いをたてよう。



役割決め

班が決まったら、役割決めをする。役割は、個人の班の中の仕事を決めるもので、まずは個人がやりたい役割に就こう。しかし、役割の決め方によって班の運命が左右されることもあるので、よく考えよう。

・班長

仕事：班員をまとめ、委員や担任とコンタクトをとる
班員の行動を把握したり、重要な書類を書いたり、校外学習委員や担任とコンタクトをとる。班員をまとめるリーダーシップや、責任感がある人がやるとよい。

・副班長

仕事：班長の代行と各役職のサポートを行う
人数が少ない班は副班長と別の仕事を兼任する。班長不在時に班長業務を代行する。そのため、いつでも班長の仕事ができるように班の状況を把握しておく必要がある。それ以外のときはほかの班員のサポートに回るとよいだろう。

・会計

仕事：班員の支出を会計報告書に記載する
当日、電車賃などの支出を会計報告書に記入し提出する。難しい仕事ではない。ただ、お金を扱う仕事なので、管理能力がある人がやるとよい。

・写真

仕事：班員の行動や訪問先の写真を撮る
訪問先での班員の様子や施設を写真として残す。のちのちの資料になるかもしれないので、細かいものでも写真を撮ろう。

・編集

仕事：班員に報告書の分担を割り振って、1つにまとめる
報告書を書く際に割り振ったパートを、班員にしっかりと書かせる必要がある。

・書記

仕事：班で話した内容や、訪問先での話などをメモ・録音する
訪問先の話は報告書作りにおいて重要な材料となる。手書きでメモするのは、班全員で行うのがよい。

2 訪問先決め

問いに対する答えを確実に得られるような訪問先を選ぼう。

Step.0 訪問先を決める前に

訪問先では、大きな問いに対する答えを導くため、取材をする。各訪問先で聞きたいことを小テーマとして設定しよう。
 以下は、65期での訪問先決めの例である(本来は数週かける)。

班長	問いを「SNSにはどのような問題があり、解決策はあるのか」にしたわけだけでも。
写真	SNSの問題ってというのは、ニュースとかでもいろいろ話題になってるし、訪問先で深く調べる必要はないと思う。
班長	でも、その問題の深刻さとか実態を、提供してるところとか5で聞いてみたいよね。
写真	警察に行けば、もっと詳細を聞けるんじゃないかなあ？
班長	確かに、対策についても聞けるだろうし。
写真	実際にネット教育をしようとしてる企業、団体とかはどう？
班長	実際被害にあってる人の話も聞きたいね。
写真	うーん。あとは法律の規制について聞けるところとか、SNS依存症について病院に行くとかかな。
書記	じゃあ、今のところアポ取りを検討している場所は
	・SNSを提供している会社
	・SNSの実態について詳しい団体
	・SNSに関連する法律に詳しい団体
	・ネット教育を行っている団体
	・SNS問題の被害者
	・SNSの依存症に詳しい病院
班長	こんなもんだよね？
	じゃあ、絞っていいこうか。

書記 病院なんだけど、今回調べたいのはSNSの問題と対策だから、依存症をどう治すかっていうのは、根本的な対策ではないし、ずれてると思った。

写真 俺もそう思った。

班長 じゃあ、1回これで訪問先見つけてみようか。
 ～訪問先候補を10ヶ所探したのち～

編集 SNS会社4社も必要ないし、1社に絞ろう。

班長 この大手のやつはどう？

写真 いいね。

書記 弁護士事務所の資料を持ってきたんだけど。

会計 「SNSの悩み、お答えします」だって。行く価値あるんじゃない？

班長 サイバー攻撃とかは警察じゃないとだめじゃないかな…？

写真 じゃあプラス警察ということだよいのかな？

班長 じゃあ、そうしよう。

書記 あとは、ネット教育してるこの4社だけど…

会計 千葉にあるやつは遠いからやめようよ…？

班長 そうだな。

訪問先決めのプロセスは、大きく分けて以下の4つがある。

Step.1 小テーマを考える(1行目～20行目)

Step.2 小テーマを絞る(21行目～25行目)

Step.3 訪問先候補をあげる(26行目～27行目)

Step.4 訪問先を決める(28行目～39行目)

それぞれのステップごとに何をすればよいか、次のページから説明する。

Step.1 小テーマを考える

テーマ決めの際に、そのテーマを問いに変えたと思う（16ページ）。その問いから結論まで導く際に必要である要素を考えて小テーマとする。

または、調べながら疑問に思った点が新しく出てきたら、それも小テーマにして調べてみるとよい。

ここでは、その小テーマの探し方を説明しよう。

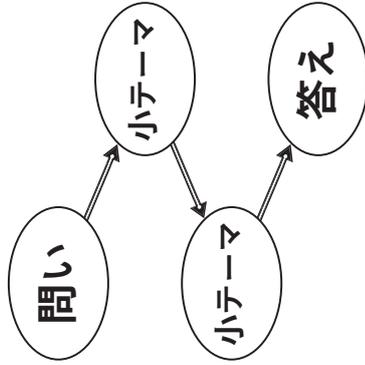


図 2-1-1

①広域型

例として、テーマを「SNS利用の問題点」とする。さらにそこから、「SNSを運営する会社」「SNS利用の実態」「SNSに関する法律」など、テーマに対する様々な観点から小テーマを決めることができ。そして、いくつかの小テーマから、運営会社、研究所、弁護士事務所などを訪問先として選ぶ。このように、1つの大きなテーマを囲むいくつかの小テーマから、訪問先を選ぶ方法である。

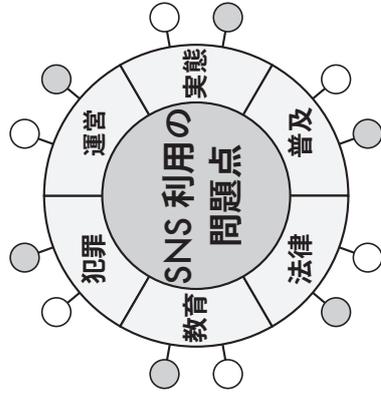


図 2-1-2

②特定型

①と同様に、「医療用ロボット」という大きなテーマのまわりに、いくつかの小さなテーマがある。さらに、「医療用ロボットの普及」についてより細かく分けた小テーマをたて、そこから訪問先を探します。このように、大きなテーマのまわりにはいくつかの小テーマの1つについて、さらに細かく分類し、その1つから訪問先を選ぶという方法である。

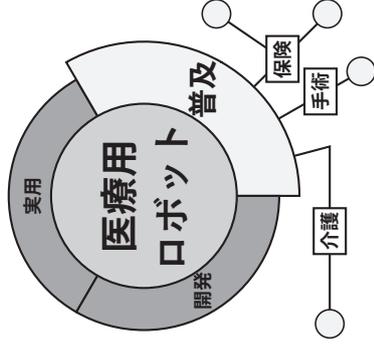


図 2-1-3

Step.2 小テーマを選別する

小テーマを絞る際に、小テーマ同士の関係について考える必要がある。

①比較型

2つの小テーマが対照的なことであつたら、それは比較することができる。比較型の場合、対立した立場の訪問先に取材することによって、双方の意見の長所・短所について知ることができる。

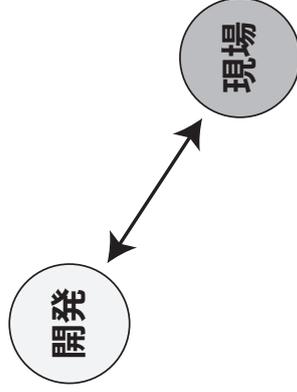


図 2-2-1

また、同じ立場で比較することによって、共通点や相違点がわかりその立場をより正確に知ることができる場合がある。

例) 介護用ロボットを開発側と実際に使う側で比較する。

②多方面型

多方面型というのは、1つの大きなテーマについて、いろいろな視点から見たことを小テーマにすることである。(たとえば「保護者から見た〇〇」、「教師から見た〇〇」、「教育委員会から見た〇〇」) この方法は、だれか1人の偏った意見ではなく、それに関わる多くの

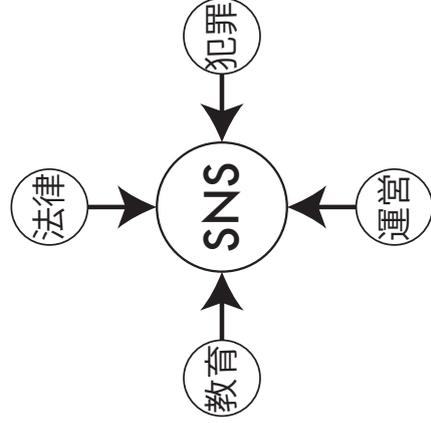


図 2-2-2

人からまんべんなく情報を得ることができる。
例) SNSを教育と法律とセキュリティなどから調べる。

③集中型

集中型というのは、そのテーマの概要から、少しずつ詳しい内容へと小テーマが移るような関係である。まず、概要を知ることのできる訪問先に行き、その後現場へ行くことで、より理解を深めることができる。

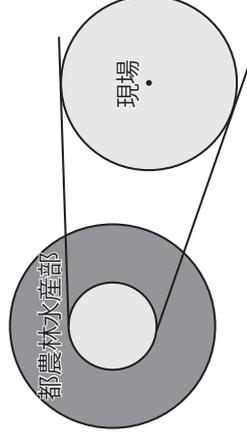


図 2-2-3

例) 農業について東京都農林水産部への取材で概要をつかんだ後、実際に農家を取材して具体的な話を伺う。

多くの小テーマの関係はこの3つである。このような小テーマ同士の関係、また小テーマと問いの関係をもとに、それをどうやって組み合わせればより問いに対する結論ができるかということを考えて小テーマを絞ろう。

(もし、その小テーマに関連する訪問先がない場合、もう1度小テーマを絞りなおす。したがって、最初からStep.3の内容を視野に入れて作業を進めるとよい)

Step.3 訪問先候補をあげる

4
2

次は、絞った小テーマを調べることができ訪問先をあげよう。「調べる」を参考に、小テーマについて詳しく調べてみよう。それによって小テーマに関する様々な情報を得るとともに、その小テーマを調べることができ訪問先を見つける。

(小テーマに関する様々な情報は質問票を書くときにも役に立つ。得た情報はまとめて、さらにそれをもとに質問を考えておく
とよい)

この訪問先の候補は、アポを取って断られたときのためになるべく多く持っておいたほうがよい。もし訪問先が見つからないときは、先生や卒業生のつてを使わせてもらおうと、訪問先を見つめられることがある。困ったときは先生に相談してみよう。

それでも見つからない場合は、Step.2に戻って小テーマを絞りなおそう。

また、訪問先の候補を見つけたら、そこで小テーマが調べられるかどうか、業務内容等を調べて検討することも必要だ。

なお、企業などへの訪問だけでなく、一般の方に街頭調査（アンケート）をするという方法もある。世間一般の考えや見方を知る際に有効な手段であるので、そのような小テーマがある班はやってみるとよいだろう（具体的な取材の仕方については42ページの「5 取材」を見よう）。

例) 多摩ニュータウンの老朽化工事についてどう考えているか、年代別にアンケートをとる。

Step.4 訪問順を考える

Step.3で決めた訪問先を、どの順に訪問するか考える。

このときに、どういった順番で訪問するとより効率よく移動できるか、よい取材ができるかということや、小テーマの同士の関係を意識しながら考えよう。

ここでは、22ページの主要な3つの型においてどのような順番で訪問すればよいか紹介する。

もし他の班と訪問先がかぶったら、合同の取材となる。その場合、自分たちの班の取材時間が減ってしまうので、似たテーマの班とは連絡を取って、できるだけ訪問先がかぶらないようにしよう。

①比較型

訪問先の意見を比べるので、どの訪問先から訪れても差はないだろう。

②多方面型

様々な観点から見ると基本的にはどこから取材しても変わらないが、取材内容の似ている訪問先は、同じ日に行くことより理解しやすくなる。

③集中型

全体像について取材する訪問先に先に行くこと、具体的な事柄について取材する訪問先の説明が、よりわかりやすくなるだろう。

そのあとは、いつ取材を開始するかなど細かい時間を含めた行動計画を考え、それをもとにアポを取りはじめよう。

ただ、アポ取りが終わらないうと、訪問先や訪問順は確定できないため、行動計画といっても仮のものに過ぎない。取材を断られたときは、ここからもう一度考え直そう。



まとめ

- ・小テーマ、訪問先はたくさん出してから絞ろう。
- ・行動計画は柔軟に変えていこう。
- ・訪問先が決まるまで、次のようなサイクルを繰り返そう。

